

どうしよう！子宮癌検診で要精密検査という連絡が来てしまった。

<子宮癌って？>

子宮癌には子宮の入り口(頸部) にできる子宮頸部癌と、子宮の中にできる子宮体部癌があります。一般的に行われる癌検診では子宮頸部癌の検診を行いますが、自治体によっては子宮体部癌の検診も行える場合があります。

子宮頸部癌は20代に前兆が見られはじめ、30代に癌として診断される事の多い病気です。昔より出産時年齢が高齢化してきた現代では、妊娠しようと思ったら子宮癌が見つかってしまったという例がしばしば見られるようになってきました。

子宮頸部癌の原因とされているのがHPV(ヒトパピローマウイルス)です。女性の90%は一度はHPVに感染するともいわれていますが、その多くの方は自己免疫により自然にHPVを排除します。HPVには100種類以上の型があり、悪さをする型と悪さをしない型に分けられます。悪さをする型のHPVに長期にわたり感染し続けると細胞が癌化するといわれています。

<子宮癌検診の結果の意味>

子宮頸部癌検診の結果は、正確には細かい分類がありますが、大きく分けると「正常」「癌」「(正常でも癌でもない) その間」に分かれます。「正常」以外の結果の方に「要精密検査」という通知がされます。

子宮頸部癌検診を受けた方の中で、要精密検査と通知がされる確率は約1.5%。精密検査を受けられた方のうち癌と診断される確率は1%弱といわれています。つまり検診を受けて最終的に子宮頸部癌と診断される確率は0.01%、1万人に1人程度(対受験者数)ということとなります。要精密検査と診断されても、そのほとんどの方は「癌」ではなく「その間」なのです。しかし正常に近い「その間」の方もいれば、癌に近い「その間」の方もいます。また、そのまま放置すると癌になってしまうかも知れません。やはり早いうちに精密検査を受けられることが望ましいでしょう。

子宮頸部癌は検診を定期的に行うことにより、癌になる手前で発見することが可能です。仮に癌が見つかったとしても早期であれば完治が可能です。

<要精密検査の結果が届いたら>

まず近くの婦人科施設を受診しましょう。

「その間」と診断された方の中でも軽度の異常が疑われる場合は、HPVに感染している

かどうかを検査し、悪化していく可能性が高いかどうかを判断した上で経過をみていくこととなります。

ある程度の細胞の異常が疑われる場合は、コルポスコープという特殊なカメラを用いて子宮頸部を拡大して観察し、疑わしい箇所の組織を採取し詳しく検査します。また、HPVの型を特定しその後の対応を決定していきます。

対応としては、経過観察、または手術療法となります。手術療法には、子宮の出口だけを切除する円錐切除術。または子宮の出口だけを特殊なレーザーを使い焼灼するレーザー蒸散術があります。

「要精密検査が必要です」という知らせのあった方は落胆する必要はありません。癌検診を受けたからこそ、癌になる手前（手前の手前かも知れませんが）で見つけることができたのですから。的確な対応をして健康な生活をこれからも続けていきましょう。

<子宮頸癌を無くすために>

令和4年4月よりHPVワクチン定期接種の自治体による積極的勧奨が再開し、令和5年4月からはHPV9価ワクチンに対しても公費補助が始まりました。これらのワクチン接種と子宮癌検診を併用することにより、子宮頸部癌は征圧できるとされています（世界保健機構 World Health Organization : WHO では年間発症率10万人あたり4人未満を征圧と定義）。子宮頸部癌はきちんと対応すれば無くすことのできる病気の一つなのです。

